

第二章 少（わか）くして予（われ）は書と剣を学ぶ

景竜元（七〇七）年の暮れ。

木立の葉が落ちた山の空は広い。今朝も剣の稽古に励む孟浩然の音が響く。五日に一度、いかなる天候の日にも、岷山の肩に住まう雲表観主（うんぴょうかんしゅ）のもとに通うようになって四年。痩せた外見は変わらずとも、体の随所に強靱な筋肉が付いた。振り下ろす剣先が朝の空気を切り裂く。

いつもの稽古と同じようであるが、今日は態を成していないと、孟浩然は感じている。掛け声を出した瞬間に、これでは、禅室にいる雲表観主に聞かせられないと思う。常と変らぬ声に正そうと意識すると、体の動きがずれる。考えるのがいけない。余計なものを振り払ってしまおうと、剣を前に衝く。足が滑る。力み過ぎだ。土に付いたずり痕を凝視する。何という稽古である

か。

雲表觀主に、幾十通りかの型を叩き込まれた。夜明けとともに家を出て、山中のこの稽古場で、厳密に定められた型を決まった順に、昼まで、決められた回数をこなす。稽古の真髄は、心を用いずに寸分違わぬ完璧さを達成するところにある。

足を定位置に戻し、慎重に次の型に移る。乱れを正そうと、このようにしていること自体が乱れた。剣を横に払う。切っ先が半円を描いて止まる。体の軸が斜めに傾いたと感じ、わずかに引き戻す。次に声を発する。耳に本来とは微妙に異なる余韻が残る。雲表觀主のもとにそれが届くのを恐れる。

今朝の稽古はこのようになる気がしていた。昨日から一つのことか心の内に居座り続けている。心がなお弱いままであるからだ。稽古を始めれば、居座るものが出て行くかと期待したのだが、なおさら頑固にそれは存在する。

昨日からのことは確かにある。ただし、稽古が出来なのは今日だけでは無い。三年ほど稽古を積んで、型をよくやく会得するに至ったと思っただけで

はまだよかった。それから少しずつ、肝心のものが抜け落ちて行くような感覚があった。

いまは、この居座る一つのものを追い出さなければいけない。心の働きをなくし、次の型へと移って行くことを続けるならば、居座るものの居場所がなくなるはずだ。そのように考えることがすでに心を働かせてしまっている。体は動かず、次の型が何であるのかを失っている。冷や汗が噴き出る。

四年間の修行は何であったのか。

孟大に連れられて、四年前に、山中の禅室を初めて訪ねた。

雲表観主は聞いていた以上の風貌だった。細く吊り上がった目、大きく渦を巻いた鼻、厚く反り返った唇、若いころに戦場を駆け巡って幾十人もの敵を突き殺したという、そのままの不逞の顔付きだった。その正面に座し、体が震えそうになった。

「姉妹」の間にいるのが最も似つかわしい自分が、この恐ろしい顔の禪僧の前に身を置き、これからその弟子になるのは、いかにもあり得そうにないと思えた。ようようの思いで、心を強くしたいとの願いを告げた。

雲表観主の声は意外にも温和だった。「何故でしょうかな」。「不動心を得たいのです」。「ほっほう」と雲表観主は笑い、「その昔、剣は詮なきものと山中に投げ捨てましてな、師の門を叩き、礼儀も何もなしに、『心は無きや』といきなり尋ねました。禅とはそのようなものであると、見当をつけておったのです。師がおいでおいでと手招きをしましたので、近寄りますと、この顎をですな、したたかに蹴り上げてな、『剣を拾って来い』とおっしゃいました。深い谷に下り、川の底から探し出して持って行きますと、師は地に這いつくばって剣を伏し拝み、『有難き仏性を捨て何とされるか』と、愚僧にも同じようにせよと言われました。地に臥せますとな、我が背をしたたかに踏みつけ、『よいか。十年間この仏性を振り続けてからもう一度来い』とおっしゃいました。その十年が満ちる前に、師は亡くなられました。まこと剣は詮な

きものです」。雲表觀主はまた「ほっほう」と笑った。

孟浩然は、弟子入りを断るためにこのような話をするのだらうと考え、思いのほどの全てを打ち明けた。雲表觀主が急に恐ろしい形相に変わったので、自分も顎を蹴られるのかと覚悟した。「剣より他に何も問わぬと誓うか」。厳しい声にも応も忝もなく、孟浩然は誓った。雲表觀主は温和な声に戻り、「孟家の御曹司がいらして、意固地に断る訳にはまいりませんでしょうからな」と、その日から稽古を付けてくれた。

二年かけて型を伝授し終わると、雲表觀主は朝と帰りに挨拶を受けるだけとなり、一切の言葉を交わさなくなった。それから一年で型を会得したと自ら思い、その後の一年でこの体たらくだ。

魏元忠の乗る舟を見送ったとき、孟浩然は剣を習って心を強くしよう決め、孟大は南園に生きると決めた。孟大の決心は人々を驚かせはしたが、概ね歓迎された。孟大は大きな体で南園中を動き回り、誰とでも気さくに話をし、誰よりもよく働く。年若いますます頑固に慣習を守るだけの祖父の孟漲か

らも、その下で物を言わない影の薄い父の孟敬行からも、人々の心は離れるばかりであるから、繋ぎ止める役割を誰か荷わなければこのままではすまない。孟大以上にそれにふさわしい者はいない。孟大が懸命に努めているのを見れば、剣を習うと決めた初志を貫かなければならぬと気が引き締まり、雨でも風でも、夏でも冬でも、岷山での稽古を休む訳にはいかない。稽古は辛いだけではない。その日の定めを終えると清々しい気分になれるし、通う道筋は楽しい。岷山は父が常に見上げる山であり、歩けば必ず異なる姿を見せてくれる。時に心を奪われ、詩のようなものが浮かぶこともある。いまは稽古が肝要と、さらりと振り払う。

昨日の夕方、嫌な報せを耳にした。井戸端で、甕に水を汲んでいると、孟振の声が聞こえた。襄陽の町から帰って来たのだった。何かのごたごたで町まで行かなければならない事態になると、孟漲は、おとなしい息子の孟敬行ではなく、甥の孟振を走らせる。孟振はなかなかの堂々の押し出しで、少々強引な手段も使いこなす。孟振の妻、つまり大叔母の霍氏は大した知恵者で、

妙手を捻り出して夫に授ける。昨日も、抛っておくと面倒なことになりかねないいざこざを、火の気が立たぬうちに揉み消すために孟振は町に行った。

事はうまくおさまったのだろうか、酒に酔っているらしい孟振は、いつもにも増して大きな声で、あれこれ自慢気に話した後で、「どうとう死んだそうさ。あそこまで生き恥をさらしたのだから、これで死んで終わりになって、まあまあよかったってことだろうな」と、わざとらしく大きな声で笑った。その様子から誰のことを言っているのか察しが付き、桶を持つ手が止まった。「へえ、町で誰か死んだのかい」。霍大叔母がやはり大きな声で尋ねた。「町ではない。ずっとずっと遠いところだ。流されて行く途中で死んだんだと。大方、生きる気力も失せ、呆け者になって死んだのだろう。ああまでなっちゃったら、どうにもならない。死んでくれてさっぱりだ」。随分と悪くお言いだけれど、いったい誰のことなのか。「いまましい魏元忠様のことだ」。「何だ、誰かと思ったら、魏元忠様かい。死んだのかい。そうなのかい。まあ、これ以上みっともないことになっては目も当てられないから、確かに、死ん

でくれてさっぱりかもしれない。「あまりひどい生き恥をさらされては、見ている方が気が滅入る。情けないというか、怒りたいというか、いつそ、笑うしかない」。「ああ、嫌だ、嫌だ。どこもかしこもろくでもないことばかり。人の世なんぞは、何千年の昔から、何千年の先まで、きつとこうなのだろう」。

甕の口から桶が外れ、水がぶちまけられた。膝から下がぐっしよりと濡れた。孟振は、孟浩然にしても褚先生にしても、魏元忠を深く尊敬していたのを知っていて、大声で笑ってみせたのだろう。「いつそ、笑うしかないのか」。孟振の言葉を自分でもつぶやいてみた。あまりの痛々しさに他にどうすることもできない。

四年前の魏元忠は、闇夜にたった一つの光明を掲げる不屈の闘士であった。襄陽にも、広い天下にも、幾千、幾万の若者が、魏元忠に続こうとしていた。その魏元忠が蔑みの対象になってしまった。

老齢に及んで醜態をさらす残念な輩は稀ではない。大方は、齢を取ればあかもなるのだろうと、同情とともに軽く指弾される程度ですむ。魏元忠は差

が大き過ぎた。魏元忠をこの世に一人の人物と仰ぎ見ていた人々は裏切られたと感じ、反動から侮蔑するに至った。魏元忠をもともと敵とみなしていた人々は、逆にむしろ妙な憐れみ示した。

魏元忠の舟を見送って一年余りが経った神竜元（七〇五）年春に、大きな政変があつた。張柬之（ちやう かんし）、敬暉（けい き）、桓彦範（かん げんはん）、袁恕己（えん じょき）、崔玄暉（さい げんき）の五人が、近衛兵を指揮する李多祚（り たそ）とともに、武力を行使して則天武后を皇帝の地位から引きずり降ろした。則天武后を上陽宮に幽閉して、息子の李顕（り けん）を皇帝に立てた。国号は周から唐に戻った。則天武后の寵愛を受けていた張兄弟は斬り殺された。

張兄弟と闘った魏元忠が都に召喚された。英雄の凱旋を、都人は歓呼の声をもって迎えた。魏元忠の栄光はその一瞬だけだった。新皇帝より高い地位を与えられると、同じ人物とは思えない振る舞いに及んだ。新皇帝は妻の韋（い）皇后に権力を委ね、韋皇后は則天武后の甥の武三思（ぶ さんし）やその子

の武崇訓（ぶ すうくん）を重用して、極めて恣意的な政権運営をした。則天武后が幽閉されたまま死んだ後に、人臣として最高の地位に就いた魏元忠は、いくら政治が乱れても、漫然とその座を温める傍観者に墮したばかりでなく、かつての政敵と友誼を深めさえした。韋皇后や武三思らが、則天武后の仇を討つかのように張柬之、敬暉、桓彦範、袁恕己、崔玄暉の五人を都から追放し、その上で恐るべき残虐な殺し方をして、魏元忠は知らん顔で安穩な日々を送っていた。

危機感を抱いた皇太子が反乱を起こした。皇太子は韋皇后の子ではなかった。韋皇后は自分の娘を皇帝の後継者にしようと工作を進めていて、皇太子との関係が悪化していた。皇太子は李多祚を仲間に入れて近衛兵を動かし、武三思と武崇訓を斬り、皇帝と韋皇后を皇城内の樓閣に追い詰めた。しかし、父皇帝まで斬ることに逡巡したために戦いに敗れ、自身が殺された。反徒の中に魏元忠の息子が混じっていた。魏元忠は事実を隠蔽しようとした。皇帝は初めは見て見ぬ振りをしたが、魏元忠を嫌う人々が曝露した。魏元忠は罪

を逃れようと見苦しい振る舞いに及んだ末に、四度目の獄に下り、皇帝の恩情でかろうじて死を免れて、遠く流罪となった。その道の途中で死んだと、孟振は町が聞いて来たのだ。

付け加えれば、則天武后の死後に発せられた遺制によって、褚遂良の名譽が四十九年振りに回復され、その全ての親族が赦されて、公職に就けるようになった。褚先生は己の出自を堂々と人に言えるようになり、南園において祝賀の宴が催された。褚先生は、母の死に際を初めて人に語った上で、「五十を超えた身で今さら世に出ることは考えられません。この身を拾ってください。南園老の恩義に改めて思いを致し、弟子の指導になおのこと努めて参ります」と言った。遅すぎた赦免に無念の思いが籠っていた。孟浩然是涙をこらえつつ、勉学と剣と二つながらに励む決意をさらに強めたのだった。

魏 元忠という人は何であったのか。昨日からそのことが頭を占めていて、

今朝の稽古はこのさまである。

原因は魏元忠だけにあるのではない。自分にもある。稽古をきちんと積んで、不動心が得られていたならば、魏元忠がいかなる振る舞いに及ぼうとも、今朝の稽古は何も変わらないはずだ。

孟浩然は空を見上げる。

灰色を帯びた雲が広がって来ている。この分で行くと、そのうち雨になるだろう。雨に打たれるのが、いまの自分には似つかわしい。凍るような冷たい雨が、激しく降ってくれるのがより望ましい。弱いこの心を徹底的に痛めつけてほしい。

稽古によって種々の事が払拭されるはずだった。稽古に期待し、稽古に打ち込もうとした。しかし、稽古には、どこから自分にそぐわないところがある。最初から感じていた。型を徹底的に体に覚えさせて、それを繰り返す稽古法は、褚先生の教授法と類似性があった。剣の稽古と貢挙の勉強とは目的が違うのだから、両者は似て非なるものと分けて考えようとした。

自分に最もそぐうものが何かといえ、楊義姉と、妹の「三姉妹」で好きに過ごすことだ。「三姉妹」の楽しみが許されるのは子供のうちだけで、いつかそれは終わらなければならぬ。魏元忠のような立派な大人になるために剣を習っているのだから、剣の稽古が自分にはそぐわぬと感じるのは仕方がない。「三姉妹」の楽しみから抜け出るためにも剣を懸命に振った。

その楽しみは、剣の稽古と関わりなく終わった。楊義姉は南園に嫁して七年目にして待望の子を宿した。霍大叔母たちの悪口もようやく静かになった。同じころに、妹は元から決まっていた莫(ぼく)の家への嫁入りの日取りが定まり、婚礼が無事にすんだ直後に、楊義姉は難産の末に長男の郊(こう)を産み落とした。ところが、息子をしっかりと抱くこともできずに楊義姉は世を去った。

打ちひしがれた孟浩然に対し、孟大はさかんに気を配ってくれた。悲しみは孟大の方が深いはずであるから、これではならじと、毎日岷山に通って稽古した。型が会得できたと感じたのは、まさにこのころだった。

しばらく経って、稽古のない朝に、祖父の孟漲が不意に現れた。祖父は八十に近く、体調も優れないと聞いていたから、わざわざ来たのは、いい話ではあるまいと身構えた。「もう決めたのだろうか」。かねてから結婚話があった。普通なら祖父の一存で決めてしまうのだろうか、南園老が最も可愛がり、楮先生が特別扱いする孟浩然であるから、祖父には若干の遠慮があった。孟浩然は、これまで返事を曖昧なままにしていた。

孟浩然は、稽古用の剣を持ち出して前に置き、「まだ修行を始めたばかりです。自分が見定められずにいます。いまはそのようなことはとても考えられません」と答えた。祖父は、必ず「うん」と言わせる気で、伯父やら伯母やらも連れ、代わる代わる説得しようとした。孟浩然の相手として見定められた女性は大変に評判がよく、断るいかなる理由も見つけ出せなかったし、孟浩然自身に、結婚しないはつきりとした理由もなかった。「三姉妹」が終わって、妻となる女性を迎えるのは何とも味気ない気がして、決められないだけだった。皆が口を揃えて強く勧める中で断るには、片意地を張るしかなく、

苦し紛れに、「妻というものは一生娶りません」と言い放った。その瞬間に、これこそが自分の本心であると感じた。

祖父たちは呆れかつ怒った。父と母に、「この倅をどうにかしろ」と詰め寄った。父は例によってぽかんと遠くを見る目で何も言わなかった。母は「夫がこのように何も申しませんのに、妻に差し出がましいことはできません」と、その一点張りで押し通した。結局、埒が明かず、祖父たちは引き上げた。後に孟大が父の孟敬行を説得し、孟敬行とともに祖父を宥め、「ならば望み通りにしてやる。今後何があっても、浩然は妻を迎えることがあつてはならぬ」と、祖父が宣言し、一応の決着となつた。

孟浩然は、剣をだらりと下げ、この有様を雲表観主に見せる訳にはいかないと思う。しかし、ここから救い出してくれるのは雲表観主だけだろうとも思う。雲表観主は禅定に入り、ここでの自分の稽古とは一切の関わりを持つ

ていないはずだ。それでも、雲表觀主は疾うに御存知なのだろう。

四年の稽古は何の成果もないのか。「もうどうしようもない。笑うしかない」と、孟振をまた真似る。自分を笑うのだ。

昨日の井戸端では、孟四に笑われた。

水に濡れたまま杲然としてしていると、孟四が通りかかり、「君はそこで何をしているのかな」と、指先でちよいちよいと肩を叩いた。斜めに見下ろすような目で、「そうやって、立っているだけで、勝手に水が甕にいっぱいになってくれるのかな。膝から下が濡れているところを見ると、大方、誰かさんがどこかで死んだと聞いて、驚いてこぼしてしまっただろう。誰かさんが死んで何だと言うのだ。君は水を汲もうとしてここに来たのだろう。だったら、水を汲めばいい。天から槍が降って来ようと、地から炎が噴き出して来ようと、それをすればいい。違うのかい」。孟四は、指をひよいと跳ね上げて、徐に後ろ手に組み、孟浩然の頭の前からつま先までをじろりと眺めまわした。孟浩然は頭を下げ、「いかにも兄上のおっしゃる通りです」と答えた。孟四は

口を半分ばかり開け、

為仁由己

仁を實踐するのは自分自身が抛り所であつて、

而由人乎哉

他人が抛り所なのではない。

と唱え、「君にはこの言葉の本当の意味がわかっていないだろう」。小さな笑い声を残して立ち去つた。

孔子の言葉だ。孟四に指摘されるまでもなく、魏元忠がどのような終わりをしようとして、自分が正しく仁の實踐をしているのならば、左右されることはない。

孟四は初めて受けた地方試験に失敗したものの、次の機会に向けて、弛まぬ努力を続けている。一度で合格する者は稀で、一回目は試験に慣れる練習の意味もあつた。孟大が貢挙を受けないと決めたことから、南園の期待は孟四に集まっている。父親の孟敬通はますます熱心に息子を督励し、孟四は身を削つて勉学に励んでいる。

孟浩然は剣を強く握る。

いつまでも弱いこの心をいかにしたらいいのか。

剣を頭上に振り上げ、一気に振り降ろす。型などない。まわりつく思惟をすっぱりと切り裂くのだ。

一度降ろした剣を上げ、また振り降ろす。切って切って切り刻むのだ。幾度も繰り返し、体が火のように熱くなる。

そうだ。

「無だ」。

自分のつぶやきに、どうしてこれまで気付かなかったのかと思う。

雲表観主のもとに四年間通いながら、無について問うことはなかった。最も肝心なことを置いて、剣だけを習っても、心を強くすることはできない。

心の何たるかを自分は知らない。

孟浩然是滅茶苦茶に剣を振り回す。腕が勝手に動いて止めようがない。足

も堪らず、林中に踊り込む。

「無だ」。

声とともに枝を撃つ。叫びの激しさに喉が張り裂け、撃った激しさに腕が痺れる。

唸り声を上げ、剣を水平に構える。そのまま木に突進する。剣が突き刺さってぐにやりと曲がる。

不意に涙が溢れる。

眼前の林が消え、瞼の裏に淡く文字が浮かび上がって来る。目を凝らすと、心の文字がくつきりと見える。

尽其心者 自分の心のある限りを出し尽くそうとするのは

知其性也 心の本性が善であるのを知るからだ。

知其性 心の本性を知るとは

則知天矣 それを与えてくれた天を知ることには他ならない。

孟子の言葉だ。

孟浩然是目を開き、自分はやはり孟子の子孫だと思ふ。心を知るには、仏の道を教わるのではなく、孟子の教えこそを学び直すべきだ。

孟子は、浩然の気を養うことで不動心が生まれると言った。孟子が理想を説き続けられたのは、天に寄せる絶対的な信頼があったからだ。天は人に善なる心を与える。その心の本性を養い成長させて行くならば、安らかな世界が必ず実現する。その実践は天に仕えることに他ならない。若く死ぬとか長生きをしようとかが運命なのではない。身を修めて、天に仕えて、自らが立てて開いて行くのが運命である。

孟子の言葉は力強い。孟子の教えは正しいに違いない。

孟浩然是涙を拭う。曲がった剣に、自分の姿が歪んで映っている。自分は孟子の子孫だ。不動心を得ようと努めて、このような歪んだ姿であるのは、何故なのか。自分が及ばないのはわかり切っている。

悲しいことに、孟子から千年余りを経た子孫である自分は、これまでの歴史が、孟子の教えの正しさを証明してくれてはいないのを知っている。

孔子や孟子の教えが、天下を安んじる最良の理念であると多くの人が認めるようになったのは、孟子から数百年を経た漢の時代の半ばだった。その漢朝が傾きかけたとき、孔孟の教え奉じる者は命がけで闘った。数多の犠牲者が出た。漢の滅亡は防げず、孔孟の教えは大きな挫折を経験した。その後は、挫折はより深刻な暗い絶望となつて世の中を覆った。襄陽の隱者の龐徳公や、墮涙碑の羊祜は、絶望の始まりのころを生き、陶淵明はそのさらなる深まりの中を生きた。孔孟の教えに代わつて老荘の教えが喜ばれ、釈迦の教えが西方から入つて来た。

霍大叔母が言うように、人の世が、何千年の昔から、何千年の先までも、絶望と近いところにあるのなら、己の一身の享樂もしくは安穩を求めるしかないのだろうか。

背後に人の気配を感じ、孟浩然是俄かに狼狽する。

振り返らずともわかる。雲表觀主だ。雲表觀主に知られたく、しかし、知られたくなかった。不肖の弟子であり、しかし、救いを求める弟子である。

孟浩然是膝を折り、地面にうづくまる。身を隠そうと、咄嗟にしたのか。額が地に付くと、そのまま雲表觀主の方に向き直る。地の底から、安堵できるものが湧き出て来ている。何もかもその前に投げ出せる人がここに立っている。

孟浩然がその格好でいたのは長い時間であったのか、一瞬であったのか。「立て。直ちにここを去れ」。

雲表觀主の声が轟いた。

孟浩然是地面に這ったまま、土を噛むようにして言う。

「ここを去ってはどうかすることもできません。ここで鍛錬を続けさせて下さい」。

「何の鍛錬か」。

「心です。不動の心を得たいと、劍の稽古に励んで来ましたが、まだまだ足りません。歪んだこの心を直したいのです」。

「心が歪んでいるのか」。

「恥ずかしいばかりに歪んでいます」。

「ならば、それをここに載せるがよい。ここだ」。

わずかに顔を上げると、雲表観主は掌を差し延べている。

「心はここにございます」。

孟浩然は胸のあたりを押さえる。

「そこにあるか。ならば、そこから抉り出して、ここに載せなさい」。

「私の全てをここに差し出します。どうか私をお導き下さい。私を仏弟子にして下さい」。

口に出すと、抑えていたものが渦を巻いてほとばしる。これが自分の本心だ。

雲表観主は掌を返し、孟浩然が切り落とした枝切れを拾い上げ、孟浩然の鼻先に突き付ける。

「そなたはこれを聖と見るか凡と見るか」。

孟浩然は凝視する。聖か凡か、その答えによっては仏弟子にしてくれるの

か。二つの一つのいづれを選ぶべきか、孟浩然にはわからない。

雲表観主は静かに笑う。

「その昔、愚僧は戦の場から頭を抱えて逃げ、師の門を叩いた。師は、太く重い棍棒を突き付け、同じようにお尋ねになった。師がいかなる答えを期待しているのか探ろうした。その瞬間に、尻に一撃を食らった。『聖か凡か、その尻に思い知らせてやる』。したたかに撃たれたあげくに、門から蹴り出された。翌日も行くと同じ目に遇った。それから毎日、尻を撃たれに通った」。

その話は、四年前に最初に聞いたのと違う。

「どうか、この私を同じように撃つて下さい」。

地の上に平らになる。

雲表観主は再び笑い、孟浩然の肩先を杖で軽く叩く。

「若い人はとかく急ぎ過ぎる。手ごろなものをすばやく拾ってすませようとする。孟家の御曹司とお約束したことは変えられはせぬ」。

「剣以外のことは一切お尋ねしないと誓いました。しかし、四年の歳月が経

つても、決して変えてはならないものなのでしょう。肝心のことを置き去りにして、虚しい日々を送り続けるべきだとは思えません」。

「肝心のことは何か」。

孟浩然は顔を上げる。雲表観主の眼差しは柔和な光を湛えているように見える。

再び胸に手を当て、

「心です。心を知りたいのです」。

「心がそこにあるのか」。

「わかりません。だから、知りたいのです。心を知らずにいるから不動心が得られずにいるに違いありません」。

「行け。いますぐにここを去れ。二度とここに来てはならぬ」。

雲表観主は優しい顔のままだ。

「どうかお許し下さい。どうしたらいいのか、何もかもわからなくなってしまうました。苦しいのです。苦しくてならないのです」。

「まことに結構だ」。

「心とは何か。この世の真の姿と何か。それをお教え下さい」。

「行け。ここはそなたのいる場所はない」。

「ここではなくてどこなのでしょう」。

「知りたいか」。

雲表観主は指を突き出す。孟浩然是その示す方を見て、意味を悟る。

「白馬山（はくばさん）でしょうか」。

雲表観主はすでに禅室へと歩き出し、

「空に足を向けて歩くなり、地に棹を差すなり、勝手に行って、勝手に苦しむがよい」。

口調は穏やかであったが、一切を拒む厳しさがある。

孟浩然是曲がった剣を手に山道を進む。

岷山と白馬山はひと連なりである。尾根筋を巡って林の外に出ると、つま先から急な坂が落ちて行く。

谷を挟んだ真向かいに白鶴巖（ほっかくがん）がある。白馬山の肩に張り出す巨岩だ。好天が続くと白色を帯び、日の光を受けて鶴の翼を思わせるように輝く。かつて、白鶴の名に誘われたものか、巖（いわお）のほど近く、溪流を臨む場所に、隠者が棲みついた。溪流が食む岩は青黒く、隠者の住まいには青巖庵（せいがんあん）の名があつた。

一年半ほど前に、その同じ場所に青巖庵が再建され、いま二人の若者が棲む。張八（ちようはち）と顔五（がんご）である。張八は襄陽の町の裕福な家の息子で、幼くして襄陽一の神童との評判が立ち、南園一の孟浩然と何かと比べられ、子どものころより交流がある。孟浩然より二歳上で、思慮深く意志が強く、孟大に次ぐ第二の兄のように慕っている。やはり魏元忠に続こうと貢挙を目指して勉強していたが、魏元忠の変節に失望して山に籠るようになった。息子のためなら何でもする父が庵を建てた。

顔五は孟浩然より一歳下で、本来は陸（りく）姓であったが、生まれて間もなく父と死に別れ、再婚した母に連れられた先で顔姓を襲った。母は数年ならずして病死し、顔家に居づらくなり、母方の伯父の馮（ふう）家に引き取られた。馮家は張八の家からさほど遠くない町中にあり、そこそこに裕福である。伯父は顔五を下僕同然に扱った。自分の息子には学問を習わせても、顔五には辛い労働を強いた。伯父の息子たちは、面倒なことを年少の顔五に押し付け、勉強にもさほど身を入れていなかった。張八は、そのような顔五を憐れみ、こつそり家と呼んで文字などを教えた。そのことが伯父や義兄に知れ、手荒い折檻を受けた。それでも学問を続けようとし、見つけられるたびに打擲された。張八は青巖庵に籠るに際して顔五を誘ったが、到底許されるものではなかった。

孟浩然が顔五の窮状を知ったのは、青巖庵に入った張八を、稽古帰りに初めて訪ねたときだった。「五郎君は青巖庵に行きたがっているのが知れて、伯父や義兄からこれまでにない酷い折檻を受けたそうです。私のせいで、気の

毒でなりません」。張八からそう聞くと、青巖庵を飛び出し、即座に馮の家に乗り込んだ。顔五を直ちに連れ出そうとしたので、顔五は仰天し、孟浩然も自分のしていることに驚いた。義兄たちが顔五を渡すまいと殴りかかって来た。喧嘩は初めてで、相手はいずれも体の大きな年長者だった。意外にも負ける気がしなかった。孟浩然は一人を投げ飛ばし、一人を蹴り上げた。腰には稽古用の剣があった。抜くつもりではなかったが、自ずと手が伸びていた。相手は俄かに怯んだ。孟浩然が雲表觀主に剣を習っているのはそこそこ知れていた。孟浩然は顔五の手を取り、青巖庵に走った。その後、孟家、張家、馮家で話し合われ、顔五は張家が預かるというかたちで青巖庵に棲むようになった。

どうして突然に危ない行動を取ったのか、後になって理由らしきものがわかった。南園において、孟浩然は馮の義兄とほぼ同じ立場にある。従兄弟たちの中で、褚先生の学舎に通えるのは選ばれたわずかな者だけだ。馮の義兄とは、学舎に通えない従兄弟たちに直接に乱暴しないだけで、後は同じだ。

南園の仕来りを孟浩然是変えられない。だから、馮家に飛び込んだのだ。

今日の白鶴巖は暗く沈んでいる。

空はいよいよ厚い雲に覆われ、風も出て、二つの山の間を枯葉が飛び交う。白鶴巖の上に何かがある。草でも木でもなく獣でもないのならば人だろう。人であるのならば顔五だ。魏元忠の死の報せが青巖庵にも届いたのならば、顔五がどのような振る舞いに及ぶのかは想像がつく。顔五の長年抑え付けられていた元来の気性は荒々しい。白鶴巖の上で天に向かって叫ぶであろう。その声は風に流されてここまで届かない。

孟浩然是坂を下る。

顔五は、貢挙など金輪際受けないと言うだろうか。張人は、逆に山を降りると言うだろうか。二人は一緒に棲んでも互いに違う。自分はどうなのか。「若い人はとかく急ぎ過ぎる」と雲表観主は言った。安易に見つかる答え

を掴んではならない。白馬山の二人とともに悩まなければいけない。

山の間の鞍部の底に達し、一方は白鶴巖を経て白馬山の頂に至る上り、一方は青巖庵を経て麓に達する下りだ。

風が強まり、止む間のない枝葉の音の中に、鳥でもなく獣でもない何かがある。聞きこるような気がする。やはり顔五が叫んでいるのか。

孟浩然是手にする剣に目をやる。それを曲げたときの激しさはおさまっている。再びそこには戻るまい。剣を地に突き立て、その場に置き去りにして道を下る。

程なく、竹の擦れ合う音に包まれる。言い伝えによると、昔の青巖庵の隠者が植えた名残で、一時期はこのあたり一帯が広く竹林に覆われていたようだ。

階段状の急勾配のあたりから竹は疎らになり、葉音の代わりに水音が耳に入ってくる。

溪流を覗くと、深い底に細い流れがある。雨が降ると一気に濁流に変わり、

轟々と山を揺らす。溪流に沿う道を下れば麓に至り、逆に登ると、すぐに青巖庵の裏手に出る。

不揃いに石を積んだ階段がある。風や水と異質な音を、鋭敏な張人は聞き取ってしまうだろう。慎重に上る。張人は必ず深い思索の中にいて、不意の闖入者を好まない。

周囲から抜きん出て高い松があり、その下にまだ新しい青巖庵がある。柴の門が溪流側に開かれ、その傍らに張人の肩が見える。

松の根もとに腰掛ける。見下ろす山の斜面から、湿った冷たい風が吹き上がって来る。先ほど通り抜けた竹林が揺れ動いている。

張人に似せて、静かに考えを巡らせようとする。

山中はこれからいよいよ荒れて来るのだろう。その中にいても、人は静かな思索を続けられるものなのか。周囲に気を引くものも多く、考えは宙をさまよう。

このような場所に居て、風雪にさらされてこそ人は鍛錬されるのだろう。

雲表観主のもとに通って劍の稽古をするのは五日に一度。ここにはたまに来て、短い時間で帰る。その程度のことから自分が得て来たものは、顔五と張八がここで積み上げて来たものに比べたら、微々たるものであるに違いない。ともに苦しみたいと思っても、二人は自分の及ばぬところに至っているのではなからうか。

松を見上げる。太い枝は、この程度の風では静寂を保っている。この松の境地に達したいと願っても所詮無理だ。

一説によると、青巖庵の隠者が植えて五百年になるという。それだけの歳月を経ているからこの姿がある。二十歳にならぬ自分は、五百年の松の下では、惨めなまでに小さい。

史書を開けば、五百年、千年の歳月は特段に珍しいものではない。史書を読んでも、時の長さは実感できない。南園老が生まれたのは百年ほどの昔。それでも十分に長い。自分はこの世のちっぽけな新参者でしかない。

松の言い伝えが正しいかどうかは別として、顔五も張八も五百年という数

が気に入っている。五百年前には、竹林の七賢人と呼ばれる人々がいた。嵇康（けい こう）、阮籍（げん せき）、阮咸（げん かん）、山濤（さん とう）、向秀（こう しゅう）、王戎（おう じゅう）、隆侗（りゅう たい）の七人は、嵇康の隠棲地にある竹林に集まっては老子や莊子を論じ合い、俗世から遊離したその議論は清談と呼ばれた。五百年の松がここに立っていることで、竹林の七賢人にいささかなりとも近づけるような気がし、顔五は嵇康に、張人は山濤に、孟浩然是阮籍に似ると、本人が思うのではなく、残りの二人が勝手に決めて面白がっている。

嵇康は、人生の目的は寿命を延ばすことだと主張した。人の長寿の限界、すなわち上寿は一般には百二十歳であるとされるが、養生の理法を得るならば、千余歳に至るのも可能で、数百歳なら少しも難しくないと、養生論を展開した。本心からそれを追い求めているときりに強調したけれども、実のところは、政事への無関心を装うためであった。

七賢人の中で現実と最も巧みに折り合いを付けたのが山濤で、国家の要職

に就いてみごとな働きをした。山濤は友人のためを思い、ある官職に嵇康を推薦した。嵇康はすぐさま山濤に絶交状を送った。俗世間と相容れない七つの理由を列挙し、官の就くのを逃れようとした。嵇康は極めて用心深く政事から身を遠ざけていたのだが、時の権力者の司馬昭（しば しょう）に嫌われ、目指した千余歳はおろか、四十歳で刑死した。

孟浩然是首を後ろに反らし、枝の間から樹の先端を見つけ出そうとする。そこが最も古くから生きて、この世をずっと見て来た場所だと思っからだ。

松を植えた青巖庵の隠者は七賢人より少しばかり先んじて生き、松は七賢人と同じ時代を生きてから、その後の五百年を生きた。それはいかなる歲月であつたのか。

松が生を享けた少し前は、まだ漢の皇室が、曹操の保護下で余命を保っていた。曹操が死ぬと、息子の曹丕（そう ひ）が漢から皇位を譲り受けて皇帝になった。それを見て、孫権（そん けん）も劉備（りゅう び）も皇帝になり、魏、呉、蜀が並び立つ三国時代となった。曹丕の孫の時代になると、魏の実権は

皇帝から司馬昭の手へと移った。司馬昭は、邪魔と見なした者は必ず排除し、嵇康もその犠牲となった。司馬昭が死ぬと、その息子の司馬炎（しば えん）が皇位を譲り受け、国号を晋と改めた。

古い王朝から新しい王朝への皇位の譲り渡しは、古代の聖天子である堯（ぎょう）が後継者として舜（しゅん）を選んで天子にしたのになぞらえて禪譲と呼ばれる。魏の最後の皇帝は、司馬炎こそが天下を託すに足る有徳者であるから皇位を譲りたいと言い、司馬炎は、自分はその任には耐えないと辞退した。皇帝は再三譲ろうとして、司馬炎は再三辞退し、まことに煩瑣なやりとりが繰り返され後に、ようやく司馬炎は皇帝になった。これが晋の武帝である。魏の最後の皇帝は、皇位から下りたことでその後三十年ほどを生き長らえた。司馬炎には前朝の皇帝を生かしておく余裕があった。後の禪譲では、皇位を失えば日を置かずして殺されるのが通例となった。もとの皇帝は、自身が皇室に生まれた運命を呪った。その悲痛の叫びを五百年の松は幾度聞いたのか。孟浩然の二十年足らずの人生の大半は、則天武后の周の世であった。孟浩

然が生まれる六年前に唐の第二代皇帝、すなわち則天武后の夫が死に、その息子の李顕（りけん）が皇帝になった。李顕は則天武后の実子であつたけれど、皇帝の本来のあり方に戻りたいと、母が握っている権限を削ろうと試みた。則天武后は李顕を幽閉し、代わりに弟の李旦（りたん）を皇帝にした。その六年後、李旦らの願いを聞き入れる形で則天武后が皇帝になった。在位十六年にして則天武后は武力によって皇位を追われ、李顕が再び皇帝になった。過去に繰り返された禪譲とは異なる尋常でないことが、孟浩然の生きている間に起こつた。

李顕はいま皇帝であっても、実権は韋（い）皇后にある。李顕はかつて母の手で皇位から引きずり下ろされたときに、いつ死を命じられるかとの恐怖から精神を病み、妻と娘の安楽公主の支えがあつて、どうにか生きていられた。皇位に復帰すると、妻や娘の好きに任せた。韋皇后は権力を握ると、次なる望みは、自身が則天武后のように皇帝になるか、娘を皇帝にするかであつた。韋皇后の政治は則天武后の悪いところばかりを習うかのようで、このような

時期であるから、魏元忠の変節はなおのこと人々を落胆させた。

松を見上げる孟浩然は、不意に、五百年もそうは長くないのかもしれないと感じる。霍大叔母は、何千年の昔から何千年の先まで変わらないと言った。そうではないだろう。常に変わり続けている。松は五百年を変わずに一遍に生きたのではない。松は常に他ならぬいまという一瞬だけを生きて来た。松が上に伸びて行くその先端は、すでに終わったことと、まだ起こっていないこととの境目にある。その境目を一瞬ごとに突き抜けて松はあの高さに達した。松が五百年の間にしたのはそれだけのことだ。

青巖庵の隠者が松をここに植えたから、松にはここで生きるその後の五百年が運命づけられた。自分はどうかなのか。南園に生まれて、南園者によってどう生きるべきかを運命づけられたのか。

孟子以来千年にして、孟子の唱えた不動心を得る者になろうと、魏元忠の舟を見送ったときに思った。千年の歳月など全くわかりもしないのに、本当は「三姉妹」でいたいだけの自分であるのに、あのときはどうしてそのよう

なことを思ったのか。そのときに立てた心を強くするという志は挫折した。心とは何であるのか。自分の志は何であるのか。五百年も長くはないと考えてみても、やはり自分の二十年は情けないまでに短い。

不意に嵇康の詩が浮かぶ。

予独何為 自分独りがどうしたことか

有志不就 志があっても成就できずにいます。

五百年前に嵇康が放った言葉がそのまま自分の耳に響く。松が嵇康の声を聞いていたのならば、ここに嵇康の声が聞こえて来ても不思議ではない。

己独りが違うという嵇康の感覚が自分にもある。南園において、自分は特別だと見られて来た。自分には生まれながらに定められた一つの道筋がある。楮先生に特別扱いされるのは、居心地のよいものではない。それでも、自分にはどこかに自分は特別だとの思いがある。

死んだ楊義姉（ようねえさん）が言っていた。「きつと、あなただけ。何もかも恵まれているのですから。だから、もしかすると、大変なものを負わなければ

ばならなくなるでしょう。でも、あなたはきつと大丈夫です。私はそう思っています」。

自分が大丈夫であるとは思えない。だから、劍の修行をしても、「三姉妹」のあのころが最も楽しく、そこに戻りたいとの思いは消えない。

嵇康はこの詩を最後の獄中で詠んだ。南園において何もかも恵まれている自分に、獄中の嵇康の思いがわかるはずがない。だから、詩は断片的にしか思い出せない。

青巖庵では、時に七賢人を気取って詩文を作る遊びもする。顔五は嵇康らしく、張八は山濤らしく、孟浩然是阮籍らしく作ったら面白かろうと、七賢人の詩文をそれぞれに真似て、出来栄えを評じ合う。二人の友は、いつも孟浩然が最も優れると賞賛する。孟浩然にしてみれば、阮籍の詩は比較的平易で真似しやすいただけで、字面の難しい嵇康の詩を割り当てられた顔五は初めから不利なのだ。

獄中の詩の最後に方にこうあった。

懲難思復 難に懲りておおもとを思考しても

心焉内疚 心はここにおいて秘かに病んだままです。

この句は、「復」という字が印象的であつたために記憶に残つた。「復」は立ち戻るべきおおもとという意味で、人間に本来備わる徳に通じる。嵇康は獄中でなお残された短い時間に、「復」に立ち返つて安らぎを得ようとして叶わず、苦しみの中で、来るはずのない未来を夢想した。

庶勗将来 こいねがうのは将来の

無馨無臭 馨もなく臭いもないありさま。

実世界の存在には、存在するが故の痕跡が必ずある。それが「馨」であり「臭」である。それが無いとは、存在の束縛から超脱した世界、つまりは天上界だ。

孟浩然は頭を深く垂れ、嵇康の詩を初めから思い起そうとする。幼児のころの回想から始まる長い詩で、その大意はわかかっていても、きちんと思い出せたのは、成人した後、自分の真意が理解されることが少なつたと嘆いた

部分だ。

性不傷物

本性は物を傷つけないのに

頻致怨憎

しきりに怨みと憎しみを招きました。

魏元忠に失望し、裏切られたと感じた。果たして、魏元忠は誰かを失望させ、誰かを裏切ったのか。最後の獄中で、もしかすると、魏元忠は嵇康と同様の心境にあったのではないのか。

叔父の孟振が「もうどうしようもない。笑うしかないか」と言った声の響きと、孟四が「孔子の言葉の本当の意味がわかっていないだろう」と笑った声が、耳に戻って来る。

孟浩然は松を見上げる。五百年の間に、松は悲しいものばかりを見て来たのか。

後ろに笑い声がある。顔五だ。

「君が嵇康だったとは知らなかった。阮籍ではなかったのかい」。

孟浩然は口を押える。張八を乱すまいと気を付けていたはずなのに、思わず知らず、嵇康の詩を声に出して唱えていた。

「可笑しいだろうな。嵇康はやはり僕には似合わないもの」。

孟浩然是わざと明るい声を作る。

「竹林の七賢人で嵇康が最も傲岸で、そこに俺が似ると見られているようだが、少しばかり違う。君の場合は、少しの違いではなく、嵇康に似るところは、残念ながらまるでない」。

そのように断言されると、反論したくなる。

「僕にだって嵇康の詩ぐらいわかる。いまその詩の深い意味を探ろうとしていた」。

「君も字面をなぞるくらいならできなくもないだろう。だが、持って生まれただものがまるで違う」。

散髪巖岫　巖や嶺に髪を乱し

永嘯長吟　　永く嘯き長く吟じます。

「この句に似合うのは、どうしたって君ではない。まだしも俺だ」。

顔五はどこか誇るように笑いつつ、孟浩然の前に回る。顔五は頭に何も載せず、嵇康の句の通りに、髪がばさばさに乱れている。

「僕だって、その気分はわかる。実際に、同じようなことだってする」。

孟浩然は頭の被り物を取ろうとする。

顔五と二人だと、やや乱暴な物言いになるのはいつものことだ。

「そんなことしないでいい。わかっている。君は血相を変えて我が伯父上のところに乗り込んで来た。それにこれだ。君には、突然に何か仕出かしてしまいうらさがある」。

顔五は腰の後ろから、孟浩然が曲げた剣を、ゆれゆらさせながら差し出す。

孟浩然は少しぎよつとして剣から目を逸らせる。あの時に激したものは今はない。

孟浩然は話をずらし、

「君はいつからここに立っていたのかい」。

「君がここに来たときには、俺はすでにいた。君が気付かなかっただけだ」。

「君は、白鶴巖の上で、嵯康のように永嘯長吟していたのだろう。声が聞こえたもの」。

「何かが聞こえたのだったら、たぶん、それは明日の俺の声だろう」。

「五百年の松から見れば、今日も明日も同じということかい」。

「理屈を通すとつまらない」。

顔五は吐き捨てるように言う。

「で、聞いたのだろう」。

「何をだい」。

「魏元忠様のこと」。

顔五はまた大きく笑う。

「そうだ、聞いたとも。揃いも揃って俺たちはまるでなっていない。一人の男が死んで、それがどうだと言うのだ。俺なら、こんなことではすまない」。

もつともつと、ぐるぐる巻きになるまで曲げてやる」。

顔五は、大袈裟な身振りで剣を回転させ、ひゅうと唇を鳴らして頭上に掲げる。そのまま踊るようにして子盃浩然のまわりを一周し、さらに奇声を発し、ふいと走り去る。

顔五が不可解な振る舞いに及ぶのは珍しくない。抑え付けていたものが噴き出さずにはいられないときがあるのだろう。

一人残された盃浩然は、また竹林の七賢人を思う。確かに嵇康は自分には似合わない。だからと言って、二人の友人が言うほどには、阮籍が似合うのではない。

阮籍で最も知られているのは、袋小路での慟哭だ。車を曳かせ、町の道を滅茶苦茶に走り回った挙句に袋小路に入り込み、進めなくなつて、しばし慟哭して後に、悄然と引き返した。

白眼と青眼の二つの目を使い分けた。志を同じくする者には青眼をもって接し、そうでない者には白眼をもって対した。

大酒を呑んだ。樽からじかに呑むのを好み、豚が仲間に加わって樽に首を突っ込んで一向に気にしなかった。司馬昭は息子の司馬炎の嫁として阮籍の娘を迎えようとした。阮籍は六十日の間酔い続けて、婚約の話が進まないようにした。もしも嫁に出していれば、後に司馬炎は皇帝になったのだから、娘は皇后になるところだった。

阮籍の詩は何回か真似をした。遊びだったから、真剣に学んだのではない。それでは阮籍の真の思いはわからない。だからむしろ安心していられた。

今日こそは、阮籍ときちんと向き合おうと、その詩を考え始めると、顔五が打って変わって静かに現れる。後ろに張人を伴っている。

張人は、頭巾を載せ、地に裾を曳くような幅広のゆったりとした衣を身に纏う。竹林の七賢人はそのような姿をしていたらしい。衣の裾を高くたくし上げて縄で縛った顔五とは対照的だ。

張人は孟浩然の隣に腰をおろし、顔五は立ったまま孟浩然の剣をくるくる回し、

「こちらの六郎君はこの剣を曲げ、ここで嵇康の詩を吟じていました。およそ六郎君らしくないと俺は思います。八郎君は谷の流れを前にして、何をしていたのでしょうかな」。

張八の前では、顔五も少しばかり言葉を改める。

「私は、少々早過ぎることを決めていました」。

と、顔五に答えてから、孟浩然に顔を向け、

「嵇康ですか。阮籍ではなかったのですか」。

「お二人が見るところ、たぶん阮籍でなければいけないのだろうと、いまはその詩を思い出そうとしていたところです」。

「思い出そうとするようでは駄目ですな。自ずと口を衝いて出て来るのでなければ」。

「僕もそう思います。つまり、僕は阮籍に似るのではありません。おこがましいです」。

張八は、

「似る似ないは、簡単に見えるようなものではありません」。

「そうそう。心の奥深いところは、当の本人にはかえってわからないですからな。曲げた痕になら明らかでありましょう」。

顔五はひねくり回していた剣を地に立てる。

張八はそれにそつと触れ、

「六郎君は心を鍛える大切な剣を曲げ、五郎君は巖を駆け巡って永嘯長吟しました。私は、今朝より、莊子の心齋（しんさい）を繰り返して朗誦していました。お二人とは、前に論じたことがありましたけれど、ようやく、その意味が掴めたような気になって来ました」。

顔五は鬚を引つ張りながら、

「ここで心齋と来ましたか。あのときは、顔回（がんいかい）が刑死する心配がなくなったのはよいとしても、それで衛の国はどうなるのだろうかと、お二人のどちらかが問い掛けて、答えがないままになっていましたな」。

「五郎君が、そんな問いは無用と、ばっさり切り捨てて話が終わったのです」。

孟浩然が指摘すると、

「ぼつさり切り捨てるほど、俺は不作法ではないだろう」。

と、笑う。

三人は竹林の七賢人の清談を真似てしばしば老荘を語り合う。「心齋」とは、
莊子が作った寓話の中の言葉だ。

孔子の高弟である顔回が、ある日、「衛の国の王様が、民を虐げる酷い政治
を行っていると聞きます。これまでに先生から学びましたことを活かし、衛
の国の病を治しに参りたいと思います」と、師匠に告げた。

孔子は「行っても刑死するだけだ」と止めた。顔回は、自分が刑罰に陥ら
ずに衛の国を改める様々な目論見を提示した。孔子は悉く無謀だと退けた。

「私にはこれ以上の考えはありません」と顔回は降参し、師に教えを請うた。

孔子が示したのが「心齋」だった。祭祀のときに身を清める潔斎をする。「心
齋」は心の潔斎である。「心で聴くのではなく気で聴く。気は虚を待ち、道は虚
に集まる。虚は心齋である。心を虚にすれば危うきことはなし」。孔子がその

ように言つたと、荘子は書いた。

顔五は舌を打ち鳴らし、

「では、そのときに戻つてですな、いま一度尋ねられたならば、衛の国をどうしようしたところで、それでどうなのだと、俺は言うことにしますかな。刑死する寸前になって、無馨無臭を恋うても遅いですからな」。

「五郎君はやはり嵇康ですか。虐政に苦しむ衛の民がいかなることになつてもいいのでしょうか。嵇康も悩み苦しんだのではないのでしょうか。六郎君はどう思いますか。阮籍も苦しんで、車を走らせたのではありませんか」。

「これは荘子がこしらえた話です。本当の孔子は、この話の顔回のように、国の病を治すために決然と出掛けて行きました。荘子は、そうした孔子の行動を、孔子自身が否定するようにわざと話を作つてみせたのです。僕等には理解し難いところがあるのは仕方がないと思います」。

「とりわけ君は孟子の子孫ですからな、荘子がわかるようでは、かえつて困りますな」。

顔五がやや皮肉っぽく言うと、張八は、

「人を羨んではならないとは思うのですが、時折、君の南園が心から羨ましくなります。南園では、孟子の教えを、その教えのままに堂々と語ることができます。私の家ではそうではありません。父は、学問をせよと言って、こうして庵も建ててくれましたが、学問とは貢挙に合格するための手段であるとしか見ていません。孔子の志も、孟子の志も、父の関心外です。息子がとにかく試験に合格し、官人になって、家が繁栄するのを望んでいるだけなのです」。

「僕のところだってそれほど変わりません」。

「南園にはすばらしい先生がおられます。褚先生は、きつと心齋もわかっておられますよ。顔回は衛の国をよくする方策を知っていると、孔子は認めました。しかし、顔回が身を刑死から遠ざける方策を知らずにいるので、孔子は心齋を説きました。心を虚にすれば危うきことはなしと。孔子は、行くなど止めたのでしょうか。衛の国をよくすると、心を虚にするのと、顔回

ならば、二つながらに全うできると、孔子は考えたのではないでしょうか。孔子がまさにそういう人だったからです。荘子は、寓話の中で、いつも、元来の孔子とは正反対のことを言わせているようであり、実は、最も深く孔子を理解していたように思います」。

「成程、わかりました。では、君はもう山を下るのですな。早過ぎることを決めたと言うからには、そうなのでしょう」。

「ちょうど区切りの時が来たのです」。

孟浩然が予想した通りだった。張人は山を出て、いよいよ貢拳を受ける。「で、君も決めたのでしょうか」。

張人の問いに、顔五は、やはり孟浩然が思っていたように答える。

「顔回には、衛の国に行くことと行かないことと、そのどちらもしないということもできないし、どちらもするということもできません。俺は、君たちが見る通りに嵇康なのでしよう。嵇康であると同時に山濤にはなれません。嵇康は心齋を得ずに刑死しました。用心していたにも拘わらずです。俺は、

巖の上で『必ず耐えざるもの七つ、甚だ不可なるもの二つ』を叫びました。それで、俺は、いつまでも嵯康を気取ってはいけなないと思つたのです。山濤でもありません。どのように決めたかはそれでおわかりでしょうな」。

「私たちに絶交の言葉を投げ付けて、行つてしまわれるのですか」。

張八の言葉に顔五は笑う。

「俺はそこまで不作法ではありません」。

「わかつています。でもいいのです、絶交と言つてくれても、庵を發つて別々の方向に行くのですから」。

顔五が叫んだと言う「必ず耐えざるもの七つ、甚だ不可なるもの二つ」とは、嵯康が山濤に送つた絶交書の中の有名な句だ。その七つおよび二つがあるから、嵯康はいかなる官位にも就かず、皇帝に推薦した山濤と交わりを絶つと宣言した。嵯康が決して耐えられないと言つた七つの第一は早起きをせねばならぬこと、第二は草野を自由に動けぬこと、第三は官服を纏つて上官を拝さねばならないこと、第四は手紙にまめに返事し世間への義理を欠かか

ぬこと、第五は葬式が嫌いなのに世俗のやり方に従わねばならぬこと、第六はがやがやとうるさい客人と交わらねばならぬこと、第七はお上の御用には何をさておいても世間のやり方通りにせねばならぬこと。官人になるには甚だ不向きな二つとは、世の教えからはみだしてしまうこと、軽々しく直言してしまうことである。

「君たちにはいくら感謝しても足りません。これから、あるいは、二度と会うことはないとしても、感謝の気持ちは変わりません。君たちのお蔭で伯父の家から出て、ここに来ることができました。あのような伯父でも、俺を育ててくれた恩があります。それに報いるためにも俺は貢挙に合格したいと思っていました。それに、もとの陸の家の名を挙げるためにも貢挙に合格したいと思っていました。しかし、その何もかもがいまでは虚しいと思えます。ここで学問をするのは、貢挙に受かって立派な官人になるためでした。しかし、よく考えると、それは学問によつて得たものを全て失いかねないことだったのです。学問をしたことで、俺はそれまで全く知らずにいたたくさん

ことを知りました。学問は俺に考える自由を与えてくれました。それなのに、学問によって再び束縛の身になるのは愚かなことではありませんか。嵇康はそれを言ったのです」。

張人は深くうなづく。

「幸いにも、俺は嵇康ではない。嵇康は名高い男でした。俺は全くの無名です。ここを発てば、誰にも振り向かれずに旅ができます。どことも知れぬ山中に誰にも知られずに身を隠せます。では、行きますかな」。

「ならば、私も直ちに山を降りましょう」。

張人は立ち、顔五と袂を分かとうとする。

孟浩然是、

「少しばかり待って下さい。発つのはいつでもできるではありませんか。いまま少し話をしてはどうでしょうか。どうしてそこまで急ぐのですか」。

孟浩然是雲表觀主の言葉を思う。三人でともに悩むつもりで来たのに、二人はすでに結論を出した。

顔五は微笑み、

「俺はなお嵇康を気取って、嵇康が阮籍に贈った言葉をそのまま君に贈るとしよう。阮籍は人の欠点を決して口にしなかった。君が人を悪く言ったのを聞いたことがない。阮籍は何物も傷つけることがなかった。君が何かを傷つけたのを見たことがない。阮籍は世間の礼法を讎のように嫌ったが、大將軍には好かれた。君は礼法を好みはしないが、心得てはいて、誰からも好かれている。阮籍には大酒を呑む欠点があった。そこは君は違って大酒を呑まない。君は阮籍の良い点を具え、悪い点を持ちませんな」。

「僕はそのように褒められる人間ではありません」。

「必ずしも褒めたとは言えますまい。君の最も憂慮すべきは、たちどころに挙げられる欠点がなく、人に憎まれたりするところがないことかもしれないからな。剣を曲げるのなら、もつともつと曲げた方がいい」。

顔五は剣を地面から引き抜いて孟浩然に渡す。

孟浩然は剣を掴み、足元から何かしら冷たいものが這い上がってくるのを

感じる。

張人は、いつものように穏やかに、

「私たちはここを後にすると決めました。六郎君も、その剣を曲げただけの決心があるのでしょう」。

「曲げた直後には決まっていた。しかし、観主様に破門され、どうしていいのかわからなくなっていました」。

「ほう、仏門に入ろうとしたのですかな」。

「そうです。不意に、それ以外に道はないとわかったのです。それで、観主様にお願いました。ところが、二度とここに来てはならぬ、白馬山に行くと命じられたのです」。

顔五は手を打ち、

「それはそうですね。観主様ならずとも、それは許さぬでしょう。君は仏門に入るべき人間ではないですからな」。

「僕は真剣でした。心とは何かをここにん極めたいのです。仏の教えにこそ、

最も深いものがあるのではないかと思うのです」。

「心を知るのは悪くはありません。君が仏門に入れば、一人のそれなりに結構な僧侶が生まれましょう。その代わりに俗界が失うものが大きすぎますな」。

「僕は仏門にはふさわしくない世俗的な人間だということですか」。

孟浩然が不本意そうな顔したので、顔五はその鼻先を突き、

「仏門の外において、君にはすべきことがある。それだけの話だ」。

「僕は一体何をするのでですか。阮籍のように大酒を食らって、行き止まりで慟哭するのですか」。

「それも悪くないですな。阮籍はあの時代にあって苦しみ、数々の奇行で人を驚かせたけれど、みごとに生き長らえて、立派な詩を数多く残した。嵇康でも山濤でも阮籍でも、誰の名を挙げるにしても、先人の行為をただ似せようというのではありません。昔の人々を慕うのは、その志に引かれるからです。先人よりも、できるなら少しでも先に進もうと思うからです。詩は志を表わします。君の詩は阮籍に似るのではなく、それを超えると俺は思ってい

る。阮籍は人の真似をしたのではない。君は君で考えるしかない。その劍をもっと曲げるか、あるいは、真直ぐに伸ばすか、それは君次第で、俺の知ったことではない」。

「僕に詩を作れと言うのですか」。

孟浩然是顔五に尋ねるが、顔五はそっぽを向いて答えない。

張八は、

「観主様に白馬山に行くように言われたのなら、君はここに残って、この庵を自由に使つて下さい。五郎君が言ったように、阮籍の真似をするのは無意味です。それでも君は、もっと阮籍に近づいた方がいい。阮籍が立派な詩を数多く残したのは、阮籍が普通の人ではなかったからです。その劍をもっと曲げるか、あるいは、真直ぐに伸ばすか、五郎君と同じように私も思います」。

張八は穏やかであるが、顔五と同様に突き放されたと感じる。二人とともにではなく、一人で苦しまなければならぬ。

松を見上げる。風は松の大き木を揺らすばかりに強まっていて、その上を黒

い雲が流れる。あたりはすでに夕方のように暗い。

「では、俺は行きますかな。これでいい塩梅に雷でも鳴ってくれば、竜神とともに、蛾眉山（がびざん）あたりへと飛んで行けるかもしれないからな」。

顔五は歩き出す。

「では、私は町に降ります」。

張八も歩き出す。

二人はそれぞれに決心を固め、自分の先を歩んでいる。ここに一人だけで残されるのは怖い。しかし、それを口に出して言えない。顔五は溪流の上の方へ、張八は溪流の下の方へと去る。

孟浩然は呆然と二人を見送る。

雨が降り出したのに追われるようにして、結局、孟浩然はもとの竹林の道を戻る。

思考がもはや続かない。昨日の井戸端からずっと考え続け、雲表觀主に破門され、二人がいなくなつた。事が多過ぎて、頭が働かない。

分かれ岐に来て、劍がないと気付く。顔五に手渡されたのまでは覚えていたが、それを松の根元に置いたのか、どこかで落としたのか、さっぱりわからない。真直ぐに伸ばすか、もつと曲げるかしなければならぬ。劍を探しに引き返す気は起こらず、そのまま白鶴巖への道を登る。

道を覆っている竹や木が雨を受け止めきれなくなり、ぼたぼたと水が落ちて来る。その冷たさに、我を取り戻したような感覚になる。ならば、心はここにあるのか。孟浩然は水に濡れた顔を掌で打つ。

あるのだろうか、それは何であるのか。無といい、虚といい、空々しくともいい、掴みようがない。だから、強くできない。

白鶴巖の真下を通る。顔五のように、巖の上で叫ぼうとする気力はない。

雨脚が強まり、道がぬかるみ出す。凍るような冷たい雨が、弱いこの心を徹底的に痛めつけてくれると、稽古のときに願つた。いざそのようになって

みると、自分は耐えられそうにない。あくまでも「三姉妹」の一人なのか。

この先の峠で、山頂には向かわずに南に下れば、一気に南園に至る。それは急な坂道だ。風はますます強まり、雨が叩きつける中を、自分は一人で歩いて行けるのか。冬のこの雨に、心の弱さばかりか、我が身さえ危うい。自分はどこまでひ弱なのか。

終身履薄氷　この身はずっと薄氷を踏む

ふと一つの句が浮かぶ。阮籍の詩だ。人の一生はひたすら薄氷を踏むようなものなのか。

孟浩然是ぞつと身を震わせる。これほど弱い自分が阮籍を気取っていたとは。

我が身を投げ出したくて走り出す。雨音と風音に包まれて、我武者羅に坂を登る。

突然に、足が竦んで立ち止まる。暗く鎖された空間へ真つ逆さまに落ちて行く坂がある。これからの自分の一生は、この坂なのか。南園で何不自由な

く暮らして来た自分は、どれほどの苦難に耐えられるのか。

一日復一夕 一日があつて、またこの夕べがあり

一夕復一朝 一夕があつて、またこの朝があります。

顔色改平常 顔の様子はいつもいつも改まり

精神自損消 精神はただただ損なわれて行きます。

胸中懷湯火 胸の中に湯や火のように熱いものがあり

変化故相招 あれからこれへと変化がやみません。

万事無窮極 万事が極まることはないので

智謀苦不饒 智謀のゆたかでないことに苦しまねばなりません。

但恐須臾間 とにかく、恐れるのは、あつと言う間に

魂氣隨風飄 魂がもつていかれて風とともに翻つてしまうこと。

終身履薄氷 この身はずつと薄氷を踏む

誰知我心焦 私の心が焦げるばかりであるのを誰が知りましたよう。

阮籍の詩が最初から終わりまで浮かんで来る。嵇康の詩を思い出すのに難

儀としたのとは違い、あたかも自分の心から出て来たかのような。やはり自分は阮籍なのか。

詩というものをもっと我が物にしたいとの渴望が生まれる。

阮籍は平易に詠んでいるようでいて心の内は複雑だ。あのときに、「無だ」と叫んで剣を曲げた自分のあさはかさを思う。何もわかっていないのに、無に答えを求めようとした。雲表觀主の言う通り、もつと苦しまなければいけない。阮籍の詩が、世の無常を型どおりに詠むのであったならばほとんど魅力をもたない。阮籍は袋小路に突き当たって慟哭した理由を何も語っていない。

「我が心は焦げる」「胸中の湯火」と詠み、それが何であるのかを言わない。孟浩然是、坂を下り始める。足を滑らせながらも、ころびながらでも下って行くしかない。

不意に身が中空に放り出される。

目を凝らすと、荒れる嵐の中に、一筋の道が浮かぶ。自分はこのを行けばよいのか。

「浩然の気が下りて来ている」。

天を指してそう言ったのは自分であったのか、楊義姉であったのか。

一筋の道は掻き消える。

「なかったのだ」。

孟浩然是、音を立てて降る雨の中を、身が傷つくのも構わずに駆け下る。

■ 傷峴山雲表觀主

一回目の上京の後の旅を終えて襄陽に帰った時期の詩。旅の間に雲表

觀主は亡くなっていた。

少予学書劍 若いころに私は書と劍を学びました。

秦呉多歳年 秦と呉を旅する多くの歳月を過ごしました。

帰来一登眺 帰り来たって峴山に登って眺めますと

陵谷尚依然 山や谷はもとのままでありますのに

豈意餐霞客

思いがけないことに、霞を食とされる先生が

溘随朝露先

朝の露よりも先に逝かれてしまっていました。

因之問閭里

このことから、故郷のことを問いますと

把臂幾人全

手を取り合った人々のうちで幾人が変わらずにいるので

しょうか。

■ 尋白鶴巖張子容顏処士

前の詩と同じころであろうか、白鶴巖に行き、張子容と顔処士が棲んでいた庵の跡を訪ねたときの詩。張子容は張八で、顔処士は学問は積んだが貢挙に合格していない顔姓の者をいう。

白鶴青巖半

白鶴巖の青巖のあたりに

幽人有隱居

隠者が棲んでいた庵があります。

階庭空水石

階のもとには水の食む石がころがり

井壑罷樵漁

林に包まれた谷には漁をする者もいません。

歲月青松老
風霜苦竹疏
睹茲懷旧業
迴策返吾廬

歲月を経た青い松が老いてなお立ち
風霜によって竹はまばらになっています。
このありさまを見て昔のことを懐い
馬を廻らして吾が廬に帰ります。

■ 聴鄭五倍弹琴

鄭愔（てい いん）という人が弾く琴を聞いての詩。

阮籍推名飲
清風滿竹林
半酣下衫袖
扠拭龍唇琴
一杯彈一曲
不覺夕陽沈
余意在山水

阮籍が佳き酒を飲みますと
清らかな風が竹林に満ち
半ば酔うて着物の袖を下し
かの龍唇の琴を奏でました。
一杯飲んで一曲を弾き
夕陽の沈むのを覚えませんでした。
あなたが琴を弾くのを聞いて私の心は山水を巡り

聞之諧夙心

平素の心願にちようど諧います。

京還贈張淮

開元二十二(七三四)年、孟浩然四十六歳、二度目の上京から帰つて後の詩。張淮(ちよう わい)はいかなる人物か不詳。

払衣何処去

衣を払つて何処に行くのかといいますと

高枕南山南

枕を高くして岷山の南で寝転がろうというのです。

欲徇五斗禄

陶淵明と同じく、五斗の禄米のために我慢して仕官しようとしても

其如七不堪

嵇康と同じく、七つの堪えられないことはどうにもなりません。

早朝非晚起

早朝などはとんでもなく、遅く起きるのでありますし

束帶異抽簪

束帯などは勘弁で、冠をはずしてざんばら髪です。

因向智者説

というわけで、隠棲の智者の説くの聞いて

游魚思旧潭

かつて泳いでいた池を思う魚の心に従うのであります。